

メルメ・カションが
イタリア使節アルミニオンに協力した話

奥 正敬

今から150年前の1866（慶応二）年7月4日にイタリアから来日した全権使節ヴィットリオ・F・アルミニオン（Vittorio Francesco Arminjon, 1830-1897）が、徳川幕府と交渉を重ねて同年の8月25日に日本との修好通商条約を締結しました。彼は帰国後この経緯を自著⁽¹⁾に纏めており、そこには彼がフランス公使館から通訳官を借りたことが記されているのです。

■イタリアの国情

イタリアの海軍中佐であるアルミニオンが日本との条約締結のため、軍艦艦長兼全権公使としてナポリを出航したのは1865（慶応元）年11月8日のことでした。しかし、イタリアは4年前の1861年に王国として統一されたばかりで、未だローマの編入さえできておらず、東洋外交よりもむしろ内政を重視しなければならない時期であったようです。加えて、ヨーロッパではプロシア（後のドイツ）とオーストリアとの間で、所謂「普墺戦争」の開戦が近づいており、イタリアも失地回復のためにプロシアと同盟して戦いに加わる可能性がありました。この緊張感は遠く海を隔てて日本に駐留するヨーロッパ各国の在日外交団にも伝わっており、アルミニオンは戦争の結果次第では対日交渉にも悪影響が及ぶ可能性も予測しています。

さらに、南部ヨーロッパでは養蚕に伝染病が発生して、絹糸産業が危機的な状況に陥っていました。イタリアでも北部を中心にして被害が拡がり、日本や中国と通商関係を持っていたイギリスやフランスを通して蚕卵紙を購入するという有様でした。

このような中で、アルミニオンに東洋への派遣が命じられたのですが、彼はフランスとイタリア国境で領土紛争が絶えなかったサボナ



V.F. Arminjon:
Il Giappone e il viaggio della corvetta Magenta nel 1866.
Genova, 1869. (本学図書館所蔵)

出身で、フランス語にも精通していました。また、著作からは冷静沈着で高い見識を備えた人物であったことが想像できます。彼の交渉能力を以て日本との通商条約の締結が実現すれば、当面の懸案である絹糸業の復興だけでなく、その後の安定した貿易が見込まれ、漸くイタリアは他のヨーロッパ諸国と一線に並ぶことになるわけです。

■メルメ・カションの協力を得て

一方、アルミニオンが出発する前年の1864（元治元）年の日本では、イギリス、フランス、オランダ、アメリカの四か国連合艦隊による下関砲撃が行われ、引き続いて徳川幕府による長州征伐が行われており、これを指揮する將軍家茂も上方に滞在するなど、国内が混沌とした状態になっていました。

事前にアルミニオンは、パリに遣欧使節団の正使とし滞在していた柴田日向守剛中に面会し、イタリア使節として日本に向かうことを告げるなどの準備を終え、ナポリから南米経由で日本を目指しました。途中、モンテビデオでコルベット艦マジェンタ号に乗り換え太平洋に入り、バタビアを経て東南アジア海域を北上し、下田から江戸湾に入って前述の1866（慶応二）年7月4日に横浜に投錨しました。

廻航した網代ではフランス公使レオン・ロッシュを訪問して、フランスから助力を得る約束を取り付けようとしています。フランスはローマを支配していたオーストリアとの関係を抱えて普墺関係でも中立を保っていました。ロッシュは日本の国内情勢から時期が適当でないとしな